

## ■ 東日本大震災から 10 年を迎えて



二 羽 淳一郎\*

2003年に会誌編集委員長を命じられ、それと同時にPC工学会(当時はPC技術協会)の理事を拝命した。以来現在まで、18年間にわたり、理事として本学会の運営に関係してきたが、2021年3月を以て、本務の東工大を退職することから、規程にしたがって本学会の理事も退任することとなった。長い間のご支援、ご協力に深く感謝申し上げる次第である。本学会では2007年度から2010年度まで常務理事、2011年度～2012年度に副会長、2013年度～2014年度に会長も務め、この間、数多くの出来事があったが、なかでも忘れられないのが、2011年3月11日金曜日に行われた総務委員会と理事会である。午後1時30分から開始された総務委員会の終わり頃である午後2時46分に東北地方太平洋沖地震の第一波が襲来した。東日本大震災の始まりであった。この日の総務委員会および理事会の重大な議題に、本会の名称変更があった。このため、当時の大野義照会長は、この地震の大きな、そして長い揺れにも関わらず、断固として理事会の開催を目指したのである。建設会社に所属する理事の方々は直ちに帰社し、交通機関がストップしたために来会の途中で動けなくなった理事の方もおられたが、委任状も含めて何とか定足を得て、理事会は成立し、PC技術協会からPC工学会への名称変更が、理事会で承認されることになった。この年は2月にニュージーランドのクライストチャーチで大きな地震があり、非対称の建物の崩壊が激しく、留学していた日本人が多数亡くなっていた。このことが思いだされ、また本会が入居しているビルの平面形状が長方形ではないことから、理事会の最中にたびたび襲ってくる余震に対して、

本当に気持ち悪く感じたことを今でも鮮明に覚えている。

本会では、PC建協の協力も得ながら、直ちに東北地方でのPC構造物の地震被害調査を行い、その成果を報告書としてまとめるとともに報告会も行っている。津波によって流されたPC橋も多かったが、タンクなどではプレストレスの効果で、損傷を食い止められた事例もあり、PCの優位性が再認識されることになった。本会では昨年12月にはPC津波防災セミナーを行い、PC技術を用いた津波防災構造物を提案するなど、津波防災に対して、継続的に検討を続けている。

東日本大震災から10年を経過したわが国であるが、2019年12月に武漢で発生した新型コロナウイルス(COVID-19)による感染拡大が2020年の最大の課題であった。本会最大のイベントであるPCの発展に関するシンポジウムは2020年に初めて高崎で開催されたが、実際にはオンライン開催となり、現地を訪れることなく終わってしまったのは誠に残念である。本年は10月に函館で開催されるが、是非現地で、対面で開催できるよう願うものである。

さて、コロナに加えて、例年のように襲ってくる大型台風や集中豪雨、たびたび襲来する大型地震など、わが国を取り巻く自然環境はきわめて厳しいものがある。また社会インフラのメンテナンスも待ったなしの状況である。政府の進める国土強靱化については、PC工学会としても、実務的、学術的に大いに貢献していくべきであり、その能力も十分にあるものと確信している。東日本大震災から10年目の節目の年にあたり、PC工学会の一層の健闘を祈るものである。

\* Junichiro NIWA : 本工学会理事  
東京工業大学 環境・社会理工学院 教授